



戦前発行の地元新聞「宝飯銃後新報」は、蒲郡の昔を知る上で大変貴重な資料です。

〈昨日のおてつだい〉

二時半すぎに学校から家へ帰った。お母さんのところへ行って仕事を聞いた。

「おえ、仕事はねえかえ」「ある」「麦かりかえ」「麦は青いでまだ刈れやあせん、まあ二、三日たったら刈れるだらあ」「ほいじゃあ、何だえ」「表にあるたき物を二つ三つに割ってくれ」

僕は座敷の上につつてある棚からのこぎりを出してきた。表に出て、長さ五メートル、直径十センチくらいの丸太を、五十センチくらいずつに切り始めた(中略)。それからお母さんのお使いで橋本屋にうどんを買いに行った。みんな

戦前の地元新聞

がたくさん待っていたので、帰りが遅くなって、家へ来て時計を見たら八時であった。すぐ火をおこして、うどんのつゆを煮た。ご飯が少し足らなかつたので、その後で炊いた。

火をくべる時、何度も消えそうになったので、ごをいそいで入れてやった。ご飯が炊けたので、おかまをおろして夕食のしたくをした。八時半過ぎであった。そのご飯を仕事から帰ったお父さん、お母さんが「うまいうまい」と言ってお食べておられたので、僕はとてもうれしかった。

右は、「宝飯銃後新報」昭和17年7月15日号に掲載された拾石の子どもの作文です。「麦かり」「たき物」「おかま」など、今とはだいぶ生活の様子がちがっています。博物館では「宝飯銃後新報」の複製版を作成し、図書館に保管してもらいました。興味のある方はぜひ図書館でご覧ください。



海に還ったクジラ

私は、4月から生命の海科学館に来ました。これまでは神奈川県小田原で育ち、大学では海の勉強とクジラの研究をしていました。昔から海とはご縁がありました。ずっと海の近くにいますが、これからはここ海のまち蒲郡で海と関わっていききたいと思っています。

さて、こちらに来てまだまだ日の浅い私ですが、さっそくミニ企画展を担当させていただきました。現在、科学館では「鯨(くじら)魚になりたかった哺乳類」を開催中です。

日本は、世界に生息するクジラ類の約半数が生息しているクジラ

大国なのをご存知ですか？ 今回のミニ企画展では、模型や標本を通して、彼らの進化や生態について紹介します。

クジラは、陸上で生活していた獣のような姿だった哺乳類が、魚そっくりに進化した奇妙な動物です。海で暮らすために、進化の過程でからだを作り変えました。鼻孔は頭頂部に移動し、後ろ足はなくなり、しまいは超音波を使うようになったものや、口の中にクジラヒゲという特殊な器官を獲得したのがあります。クジラ達はさまざまな工夫の末に、今の海を生き抜いているのです。

また、当館の一階にはクジラの化石が展示されています。ちょっと見方のコツを知るといろいろなことが分かり、この化石は「ただの骨」ではなくなります。ミニ企画展では、そんなちよつとしたコツも紹介しています。

